



## 45周年記念特別寄稿:情報という言葉を探ねて (1)

小野, 厚夫

---

(Citation)

情報処理, 46(4):347-351

(Issue Date)

2005-04-15

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

利用は著作権の範囲内に限られる

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90001558>





創立45周年記念特別寄稿

情報

という

言葉を探ねて

(1)

小野厚夫

大手前大学社会文化学部キャリアデザイン学科  
ono@otemae.ac.jp

今日のキーワードとなっている情報という言葉は日本で作られ、1876年出版の訳書『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』に最初の用例がある。原語はフランス語の *renseignement* で、敵の「情状の報知」の意味で使われた。初期には情報と状報が併用されたが、情報に統一された。兵語として用いられていたが、次第に一般化し、日露戦争後には国語事典に収録されるようになった。

戦後情報理論の導入に伴い、英語の *information* の日本語訳として用いられるようになった。これら130年に及ぶ情報という言葉の歴史について調べた内容を、用例を示しながらたどってみた。

## はじめに

戦後しばらくを代表する言葉は「文化」で、文化住宅とか文化包丁という言葉まで生み出したが、今日を代表する言葉は「情報」であろう。ところでこの「情報」という言葉はいつごろから日本で使われ、それがどのように用いられてきたのだろうか。

『孫子』に間諜を意味する「間」や「敵之情」という用例がある。また「情報」という言葉は中国でも使われている（ただし、後述するように意味は若干異なる）。そのせいもあって、語源は漢語ではないのかという疑問がもたれる。しかし、さねとうけいしゅうの『中国人日本留学史』では、中国人が認めた日本語来源の中国語の1つとして「情報」を挙げている。また、上海辞書出版社が発行した『漢語外来詞詞典』では「情報」は日本語来源の中国語であると明記している。これらの資料からみて、「情報」は日本で作られた言葉とみなすことができよう。

私が日本における「情報」の用例を遡って調べるようになったのは平成に入ってからのものであるが、その動機となったのは、当時定説となっていた鷗外造語説の造語という言葉に疑問を持ったことと、情報処理学会の学術講演会で今は亡き大島進が、鷗外が『戦論』で「情報」と「状報」を使い分けていると講演したことによる。ここではできるだけ資料を提示しながら、「情報」という言葉の歴史をたどってみることにしたい。なお、文中敬称は省略させていただくことにする。

## 「情報」の初出

明治維新後、新政府の下で陸軍はフランス式、海軍はイギリス式の編成を採用することになり、1870年10月の太政官令でこの旨公示された。この政策にそって陸軍ではフランス軍人を教官として多数雇用し、またフランスから多くの典範令や教範などを取り寄せては訳し、それらの助けを借りて軍人の教育や訓練を行った。防衛庁防衛研究所にある『陸軍教育史』をみると当時のありさまが次のように記されている。

兵学寮に於ける教科書の如き、未だ全く完成するに至らず。外国の兵書及び典範令に準拠し、随て翻訳すれば、随てこれを教授する有様にして、兵学寮の経費の如き、その生徒定員を百名として一ヶ月金千両と概算せしも、その主要なるものは翻訳及び印刷費なりしに、是は当時如何に将校教育に対し欧州の智識を採用するに汲々たりしかを知るを得べし。

明治六年（1873年）七月、陸軍省内必要の書籍は総て第六局に於て購入し、その需要ある局、課に貸与し、また各寮、局、司に於て翻訳に着手する場合には、一応第六局に打合せ、無益なる重複を来さざる様注意すべき旨を命令せり。当時兵書翻訳の如何に盛んなりしかを想見すべし。

1873年に兵学寮の高橋維則が『佛國陣中軌典』を訳出したが、その後1875年になって、フランスで新式の歩兵陣中要務が刊行された。陸軍省の官房御用であった酒井忠恕はたまたまその本を読んで、これが陸軍にとって緊要で、かつ不可欠な軌典であると判断し、直ちに翻訳にとりかかった。4カ月ほどで翻訳を終え、本省から許可を得て、1876年10月に『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』という書名で内外兵事新聞局から出版した。この訳書の中に「情報」という言葉が数多く用いられており、これが現存する書籍に情報という言葉が現れる最初の用例になっている。

それらをいくつか示せば次の通りである。

演習では「命令、情報を伝致する法を新兵に慣熟せしむる」

前哨の任務の一つは「敵の陣地、運動、謀計の情報をわが軍隊に通知すべきこと」であり、前哨勤務の「主旨に関する命令、情報を伝致する法を新兵に慣熟せしむるも、またこの教習中に於てす」

斥候は「歩哨脈外に出て地形を細捜し、敵の陣地運動を注目し、己に利すべき情報を求め、その搜索にあたりて忌憚することなきものとす」

「総て軍の利害に係る諸情報は、その軽重により、あるいは口演を以て、あるいは筆記を以て、速に前衛司令に報道するものとす」

「偵察によって得る諸情報は、戦場中常用する他の探情法と類似するものにして、すなわち旅客、囚虜、奔来人、間諜等の告報なりとす。この各種の情報は、よろしく対照すべきものにして、これを聚収するは通常参謀官に属するところなり」

### 訳本の普及

酒井の訳本が出版された翌年に西南の役が起きたが、平定されて国内が安定すると、陸軍は合同演習を再開した。1878年の8月に仙台鎮台で、11月に名古屋鎮台で、また翌年3月に東京鎮台でそれぞれ実施された野営演習の手続き書を見ると、いずれでも演習科目は『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』によると明記されており、この



訳書が野営演習で教習書として重用されていたことが分かる。これにより、「情報」という言葉は陸軍内に広く普及していったとみてよい。

それまでの兵書は官板で、私著として許可されたのはこの訳書が最初である。おそらく、おびただしい部数が印刷され、版木がもたなくなったと思われる。『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』は版木を新たにし、内容も一部改訂されて、1881年11月に再版された。この間に酒井は改名したため、訳者名は酒井清に代わっている。

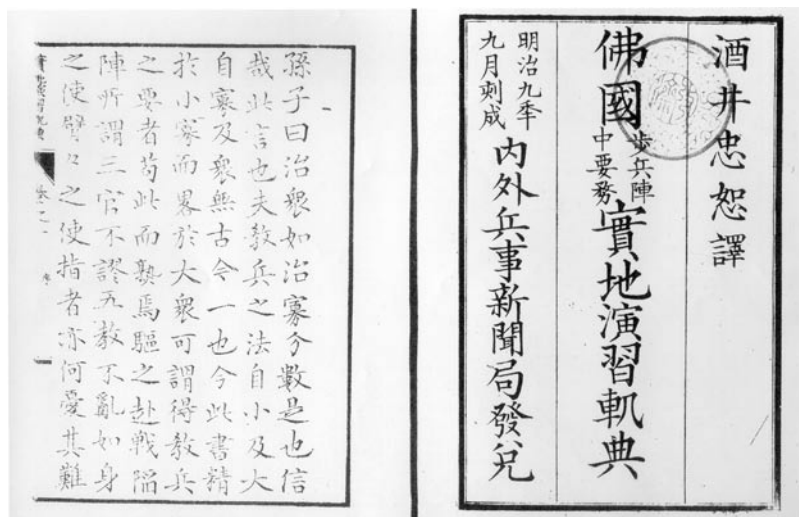
なお、再版されるまでの間に「情報」という言葉が見いだせるのは、同じ酒井忠恕が1878年に訳出した『佛國参謀須知 軍術部』の1冊にすぎない。それも綴じ込みにある表の項目に「通過セシ地統計上ニ係ル情報及ヒ細解」と記載されている1カ所だけである。

### 「情報」の意味

酒井は『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』の改訂版とほぼ同時に『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典抄』を出版している（この本は国会図書館のWebページで閲覧できる）。これは演習軌典の要点を抜き書きした問答集であるが、その中で一部の用語の右側にフリガナ、左側に意訳が付けられている。「情報」にも意訳が3カ所付いており、それらの用文を、意識の部分を括弧でくくって示せば次の通りである。

斥候ナル者ハ其兵力一定セサル枝隊ニシテ、歩哨脈外ニ出テ地形ヲ細捜シ、敵ノ陣地運動ヲ觀察シ、敵状ニ関スル情報（しらせ）ヲ求メ、又敵ヲシテ其探偵ヲ行フニ畏レ憚カラシメ、且ツ隣隊哨所ノ連絡ヲ保持スル者ナリ

交代ヲ受ケタル小哨長ハ、上番ノ者ニ其得シ情報（て



酒井忠恕訳  
『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』

木版印刷の黄表紙和装本で、寸法は19×13センチ、3巻で構成されている。国立国会図書館および国立公文書館で閲覧できる。

写真は巻一で、国立国会図書館所蔵

きのようす) 及ヒ哨令ヲ伝知シ、且ツ之ト俱ニ庇掩スヘキ地上ヲ巡視ス、而シテ歩哨ノ交代畢リシ后チ大哨ニ集合ス

偵察ニヨリ得シ総テノ情報(しらせ)ハ、何ヲ以テ之ト対証スルヤ

これらの添え書きから、酒井は「情報」を敵の「情状の知らせ、ないしは様子」という意味で用いていることが分かる。したがって、「情報」は敵の「情状の報知」を縮めたものと解釈することができよう。

### 「情報」の原語

フランス語で「情報」に当たる言葉として思いつのは *renseignement*, *information*, *intelligence* の3語である。酒井が「情報」の訳語を充てたフランス語はそのいずれかということになるが、兵語であり、かつ上記の用例からみて *renseignement* とみなすことができる。しかし、訳本には原本の書名が明記されていないため、長いこと確かめられずにいた。いろいろ調べているうちに、出版元である内外兵事新聞社が発行している『内外兵事新聞』に次の広告記事があるのが見つかった。

士官学校出仕陸軍少佐酒井忠恕君ハ、今般仏国実地演習軌典歩兵陣中要務ト云ヘル書ヲ翻訳セラレタリ。此書ハ西洋紀元千八百七十五年十月仏蘭西政府ニ於テ著述セシ「アレストリクシヨン、プラチツク、シュール、ル、セルビス、ト、ランハアントリー、アン、カアパアギユ」ト云フ書ニテ歩兵実地演習ノ事ヲ仔細ニ記載シ、実ニ軍人兵士ノ熟読精思スベキシテ、一日モ手中ヨリ離スベカラザルモノナリ。

この文面から原本は「Instruction pratique sur le service de l'infanterie en campagne」であると判読できる。そこで、フランスの国立図書館で調べたところ、この本は野外演習軌典の4部作、すなわち、総則と三兵種である歩兵・騎兵・砲兵篇の1つで、歩兵篇であることが分かった。原書は9×14センチ、205頁の活版印刷で、携帯に便利のように製本されている。1875年に発布された軌典の原文と訳本を対比したところ、予想通り酒井が用いた「情報」の原語は *renseignement* であることが確認できた。

白水社の『仏和大辞典』を引用すると、

*renseignement* は人や物を知る上で助けになる資料や調べで、*information* はさらに明確な、突っ込んだ情報やニュースである。たとえば、人を雇い入れる場合にはその人に関して *renseignement* を求めるが、取引のさいに疑わしい相手方については *information* を求める。

と記されている。このように、最初の「情報」の原語は *information* よりも確度の低い情報資料の意味で用いられていることに注目する必要がある。

当時陸軍省では西周に命じて兵語字書を編纂中であつた。原本としてオランダの『四國語對照兵語字書』を用い、これに日本語訳を付加した。作業は難航し、ようやく1881年に『五國對照兵語字書』として出版された。フランス語、イギリス語、ドイツ語、オランダ語、日本語の順で対照語が併記されているが、*renseignement* に対応しているのは次の記述である。

*Renseignement*, m. — Nachricht, f.  
— Information, Intelligence,  
— Berigt, n. 報知



『佛國歩兵陣中要務實地演習軌典』  
卷一、前哨の任務

るように、戦時において得られる情報の多くは事実と異なり、嘘や偽りだったり、すこぶる不確実なものが多い。したがって指揮官はできるだけ多方面から多くの情報を集め、真実か偽りかを判断した後でなければその情報を作戦の指導に利用できない。このため戦時においてはあらかじめ準備した地図や、各種の報告、搜索や偵察によって得られる結果、諜者からの報告、電信電話の傍受、住民や旅行者、俘虜や残された傷病者の陳述、戦地で収集した新聞とか信書、電信文など、広範囲にわたって情報を収集する。

### 「情報」以前の相当語

ほどなく陸軍はドイツ式に切り替わり、それに伴って「情報」の原語もドイツ語の *Nachricht* に移行する。

### 命令と情報

歩兵に対する実地演習の目的の1つは、新兵が命令と情報を明瞭かつ確実に伝達できるように習慣づけることにある。伝達の方法は、命令が上官から順次下士官の方へ流されるのに対して、情報の方は逆に兵卒から上官の方へ流される。いずれも途中で勝手に変更したり、脚色することは許されない。

たとえば、斥候は目的地に出向いて地形を調べたり、敵の陣地や動きを探索する。戻ってきてからその結果を上官に報告するわけであるが、そのさいに報告者自身が目撃したことと、他人が見聞したこと、他人に尋ねて得たこと、自分が推測したことを明確に区別して、通報するよう教育する。

後三年の役で雁行の乱れるを見て伏のあるを知ったという有名な故事がある。この場合、直接目にしたのは空を飛ぶ雁の動きであって、伏兵を直接目撃したわけではない。もしそうであれば、伏兵がいるというのは単なる推測に過ぎず、この場合、見もしなかった伏兵がいたと報告してはいけない。実際に見たことと、推測されることをはっきりと区別して報告するよう、日頃から訓練するのである。

斥候から報告を受けた上官は、さらに自分の上官や周りの部隊へその情報を報告する。そのさい、場合によっては実際に目撃した兵士を連れて上官に報告するよう指導している。

情況を判断するさいに、情報は重要な役割を果たす。しかし、クラウゼヴィッツ (Clausewitz) も指摘してい

それでは酒井が「情報」という言葉を充てるまでに、それに相当する言葉としてどのような言葉が使われていたのだろうか。陸軍兵学寮から訳出された兵書を眺めてみると、1871年の荒井宗道訳『兵法中學』では「報知」、同年の柳田如雲訳『戦略小學』では「新聞」、72年の辻本一貫訳『改譯陣中軌典』では「敵状の報知」、「敵報」および「報達」、73年の高橋維則訳『佛國陣中軌典』では「報知」および「報告」、さらに74年の『陸軍士官陣中必携』では「報知」といった言葉が使われており、当時兵学寮の教官の間では「報知」が一般的な翻訳語だったことが分かる。

このほか、65年の大鳥圭介訳『官版野戦要務』では「報知」、67年の『兵學提式』では「報告」、68年の『兵士懷中便覽』では「新聞」、69年の『野戦兵家必用』では「新聞」、70年の瓜生三寅訳『官許衛兵要務』では「報知」、廣瀬元恭訳『陣中軌典』では「報達」、堤薫真訳『官版兵學提要』では「告知」という言葉が、「情報」に相当する言葉として用いられている。いずれにしても「情報」という言葉を酒井の訳書以前に見いだすことができない。

### 酒井忠恕について

訳者である酒井忠恕は幼名を鳥居八十五郎という。1860年に外国奉行 (兼神奈川奉行)、62年堺奉行、64年から66年まで田安家家老などを務めた鳥居越前守忠善の養子である。忠善の母親は酒井但馬守忠宣の娘で、おそらく忠宣の一族から鳥居家の養子に入ったものと推測される。

鳥居は少年時代から語学の才能に長けていたようで、1863年には14歳で開成所の優秀生徒に選ばれ、英学句読教授の出役を仰せつけられている。65年に伝習掛からフランス語伝習を命じられ、横浜語学所の第1回伝習



生としてフランス語の教育を受けた。

幕府はフランス公使ロッシュ（Roches）の勧告もあり、仏学伝習生の優等生をパリに留学させることにし、1867年5月に13名、6月に8名を選抜した。鳥居は6月の追加上申で選ばれたが、その直後、陸軍総裁から当時三兵伝習の通訳で派出していた者を留学させると陸軍御用に差し支えるという申し出があった。結局、鳥居等10名の留学は差し止められ、それ以外の9名が8月に横浜を立ち、フランスへ向かった。

当時鳥居は砲兵差図役勤方で、フランス公使館秘書として鹽田三郎、長田銈之助と共に通訳の仕事に就いていた。その頃の鳥居の写真が日本に派遣されていたフランス軍事顧問団のシャノワース（Chanoine）団長の遺品の中に残されており、ポラック（Polak）の『絹と光——知られざる日仏交流一〇〇年の歴史』に掲載されている。また、人柄については、フランス海軍に籍を置き、幕末に日本を訪れたデンマーク人スエンソン（Suenson）の残した『江戸幕末滞在記』（長島要一訳）に次のように記されている。

トリイはなんとも貧弱な小僧でたったの十八歳、いたずらっぽい目をして底抜けに陽気でおしゃべり、拔き出た猿真似上手で、おまけに人の滑稽な側面を見破る鋭い視線をもっていたので、しかつめらしい威厳のある人物をふくめていろいろな人間の傑作な物真似を諷刺的に演じて見せては何時間もわれわれを楽しませてくれた。

ところで『陸軍豫備後備將校同相當官服役定年名簿』に記載されている満年齢から逆算すると、鳥居は1851年10月の生まれである。したがって、文書に残されている上記の鳥居の年齢は数え年で1つ多く申告されていた勘定になる。

明治維新後に、鳥居は開成学校の三等教授になったが、1869年8月に兵部省に出仕し、姓名を酒井忠恕に改めた。忠恕の読み方については資料がなく、はっきりしない。上等通弁から兵学大助教、少教授を務めた。

山城事件の責任をとって一時陸軍卿を退りぞいた山縣有朋が再び陸軍卿に戻ったのは1873年6月のことである。このとき酒井は卿官房の伝令使になり、文官から陸軍少佐に任じられた。伝令使は今流に言えば陸軍大臣秘書官の役であり、酒井の後に田島應親、乃木希典、福島安正などが務めている。

### 伝令使任用のいきさつ

ここで酒井が伝令使を務めるようになったいきさつに

ついて少し述べておきたい。明治初期に兵学寮がフランス人教官を雇用するにあたって中心的な役割を果たしたのは田島應親である。招聘したフランス軍事顧問団が横浜に到着したのは1872年4月のことであるが、彼等が実際に仕事を始めてみると、それぞれに通訳が付いていないと物事は何も進まないことが明白になった。このため田島が奔走して、主として前に横浜語学所で伝習した人達を口説き落とし、短期間の間に27,8名の人材を通訳として兵学寮に集めた。酒井もその中の一人であり、その際兵学寮の少助教に任命された。おそらくこの間の心労が災いしたものとみえ、田島はその直後に病に倒れ療養を余儀なくされてしまう。

この時田島は秋月新と共に陸軍省の秘史局に配置転換されており、伝令使に任命される運びになっていた。しかしこの病のため、73年4月には秋月だけが伝令使に任じられ、田島は東京滞在を申しつけられた。当時政府や陸軍内部にはフランス顧問団にあまりよい感情をもっていない者や、偏見をもった者が少なからずおり、顧問団と陸軍の間でいろいろとトラブルが起きていた。たとえば73年3月に鎌倉で実施された野営布陣伝習に兵学寮の少年隊150名がフランス教官に断りなく欠席して問題になっている。通訳は兵学寮にほとんど駆り出されてしまったため、田島が病欠になると本省の中に通訳のできる者がおらず、顧問団の首長であるマルクリー（Marquerie）が出省してくるさいにはわざわざ兵学寮から通訳が同道する始末となった。

このため田島の代役が必要となり、急遽田島より年下ではあるが横浜語学所の上級生だった酒井に白羽の矢が立った。このとき酒井は文官だったため、まず陸軍少佐に任じられ、その上で6月5日に伝令使を申しつけられている。田島と秋月はすでに4月に陸軍少佐に任じられており、これとバランスをとるための処遇だったと思われる。

ようやく病気が全快した田島が伝令使に着任したのは9月になってからのことである。役目を終えた酒井は12月5日に伝令使の職を解かれ、文官に戻った。このため、酒井は陸軍少佐止まりである。その後、官房御用と兵学寮御用を兼務し、この時期に実地演習軌典を訳出した。また参謀本部文庫課長となり、翻訳課長を兼務し、1880年に同県内に同姓者がいることを理由に酒井清と改名した。1889年に病気のため陸軍省を退職し、1897年6月、48歳で逝去し、麻布の天真寺に葬られた。天真寺は酒井忠宣の菩提寺である。

（平成17年2月14日受付）